

フィリピンにおける感情的分極化の進行  
三輪洋文（学習院大学）

今日、「自分の党に対する好感情と相手の党に対する負の感情の隔たり」(Druckman and Levy 2022, 257) が拡大する感情的分極化が世界的に問題となっている。当初、アメリカにおける過去 30 年間の感情的分極化の急速な進行が注目されていた(e.g., Iyengar et al. 2012)が、比較世論研究によってそれがアメリカに留まるものではないことが明らかになってきた(e.g., Boxell et al. 2024; Garzia et al. 2023; Gidron et al. 2020)。感情的分極化が問題視されているのは、それが民主主義の後退の一因であると有力に主張されているためである(e.g., Orhan 2022)。そのミクロなメカニズムとしては、党派心が強くなりすぎる結果として、自分の政党の候補者が非民主主義的な主張や行動をしても、対立する政党を倒すためであればそれを支持してしまったり(e.g., Graham and Svobik 2020), そのような自党の政治家の行動をむしろ民主的だと認識してしまったり(Bryan 2023; Krishnarajan 2023)することが示されている。

これに対して、フィリピンは従来、感情的分極化（あるいはより一般的な政治的分極化）とは無縁の国だと考えられてきた。このことは、既存の学術世論調査データからも明らかである。図 1 の上段右と上段中央のパネルは、数十か国を比較可能な設計で実施されている Comparative Study of Electoral Systems (CSES)の 2010 年と 2016 年のフィリピン調査において、党首への好き嫌いを 11 段階で尋ねた質問の回答の分布（対角線上のグラフ）、各党首間の 2 変量分布の概観（下三角部分）と相関係数（上三角部分）を示している。注目すべき点は、与野党の党首が入り混じる中で、ほとんどの党首の組み合わせにおいて、相関係数が正であることである。政党間で対立が起きていれば、ある政党のリーダーを好きな有権者は、それに対立する政党のリーダーを嫌いなことが多く、そのような関係があれば相関係数は負になるはずである。参考として、感情的分極化が激しい国の代表例である 2024 年のアメリカでの同様のグラフを下段真ん中に示している。これを見ると、同じ党のリーダー間には正の、異なる党のリーダー間には負の強い相関がある。また、日本は CSES 参加国の中でも感情的分極化が最も弱い国の一つである(Miwa et al. 2022)が、2017 年の同データで同じ図を描くと、それでもなお自民党と立憲民主党・共産党の間で負の相関がみられる。ほとんど負の相関がみられない 2016 年までのフィリピンの状況が、非常に特異であることがわかる。

しかし、2016 年以降のフィリピンは、異なる様相を見せている。ロドリゴ・ドゥテルテ大統領の強権的手法による統治の下で、民主主義の後退が進行した。その後任を選ぶ 2022 年 5 月の大統領選挙では、ボンボン・マルコスが、副大統領選挙に立候補したドゥテルテの娘サラと連携してドゥテルテの後継者として名乗りを上げ、ドゥテルテ政権で副大統領を務めながら大統領と対立していたレニー・ロブレド候補と激しい選挙戦を繰り広げた。選挙期間中には、両陣営の対立が先鋭化し、ロブレドに対する偽情報を含むネガティブ・キャンペーンが展開されたと言われる。

実際にフィリピンの 2022 年大統領選挙で感情的分極化は進行したのだろうか。この問いを探るために、本研究課題で収集した調査データは貴重な資料となる。我々は、本共同研究助成をも

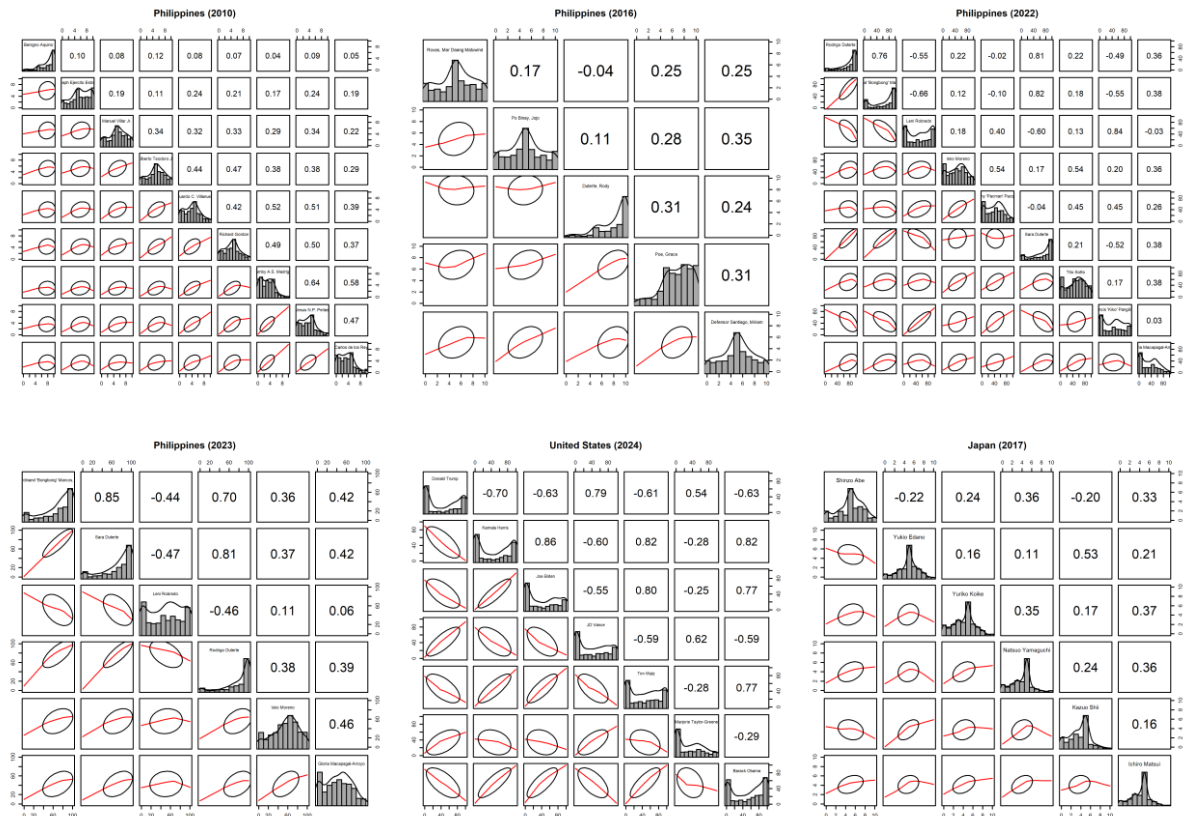


図1 政治リーダーに対する好悪尺度の分布と相関

とに、調査会社のモニターパネルに登録した人を対象としたオンライン調査を2022年5月（大統領選投票日前）と2023年3月に実施した。回答者数はそれぞれ3,126人と3,061人である。同様の調査を、2024年3月と11月（大統領選投票日前）にアメリカ（それぞれ7,761人と5,133人）でも実施しており、図1のアメリカのデータはこの11月調査に基づくものである。これらの調査では、党首や大統領候補者を中心とする政治リーダーへの好悪を0～100の尺度で尋ねた。

図1の上段右と下段左のパネルが、それぞれ2022年と2023年のフィリピンの調査結果を示している。2016年までとは一転して、マルコス+ドゥテルテ父娘陣営とロブレド+副大統領候補キコ・パンギリナン陣営の間で、強い負の相関がみられる。これらの相関は日本の与野党陣営間のそれよりもはるかに強く、特に2022年の選挙期間中はアメリカに匹敵する強さである。また、各リーダーの好悪の分布をみても、極端な好感または嫌悪を示す回答者が多い。フィリピンではわずか6年の間に感情的分極化が急速に進行したことがうかがえる。

より定量的に感情的分極化の程度を評価するために、Miwa et al. (2025)が提唱する interaction-based polarization score (IPS)を用いて、各国の感情的分極化度合いをランク付けしたのが図2である。本共同研究助成の調査以外は CSES Module 5 (2016–2021)のデータを利用し、比較のために同 Module 3 と 4 に含まれる 2010 年と 2016 年のフィリピンの結果も含めている。ただし、評価対象が党首または大統領候補者に限られている CSES に合わせるため、本共同研究助成の調査もそれ

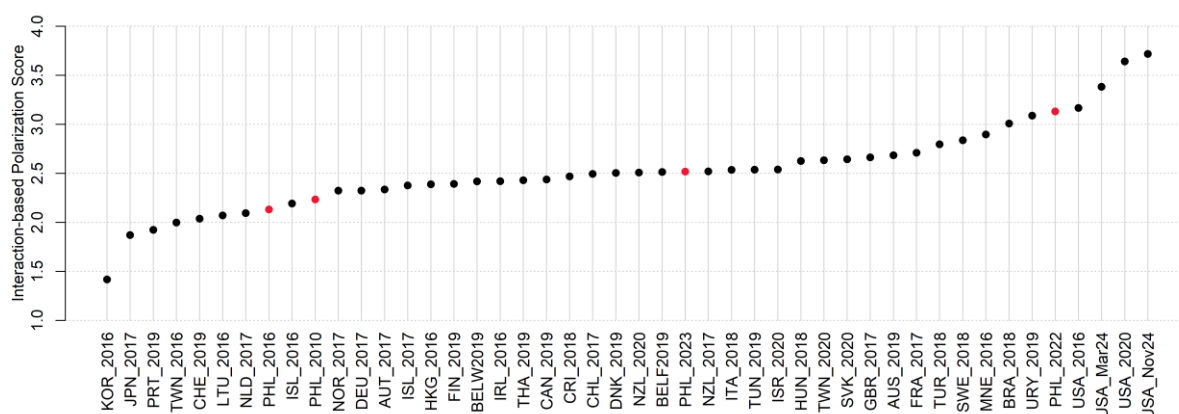


図2 国レベルの感情的分極化指標のランキング

らに限定して IPS を計算した。

我々の調査は CSES と異なり無作為抽出標本によるものではないこと、我々の調査と CSES では好悪の測定方法が 101 点か 11 点かで異なることに留意する必要があるものの、フィリピンは 2010 年と 2016 年には下位グループに位置しているのに対して、2022 年にはアメリカを除くと今回の分析対象の中で最も感情的分極化の程度が高い国と評価される。選挙が終わって 1 年弱が経過した 2023 年調査の時点ではやや落ち着いたが、それでも 2016 年までと比較すると高い水準にある。

では、こうした感情的分極化は、フィリピンでドゥテルテ政権以降に生じたとされる民主主義の後退と関係しているのだろうか。この問いに我々のデータから答えるのは容易ではないが、個人レベルでの政治リーダーへの好悪の激しさと非民主主義的態度の関係を分析することには価値がある。我々のフィリピン調査では、絶対に投票しない候補者を答えた人に対して、その候補者が政治的目標を達成するのを阻止するために、様々な政治的暴力（投票妨害、支持者の所有物の破壊など）がどの程度正当化されると思うかを尋ねた。また、投票予定の候補者と絶対に投票しない候補者をともに答えた回答者に対しては、その信念がどの程度狂信的かを測定する質問（「絶対に投票しない候補」の支持者が死んだ方が国がよくなると思う」など）を設けた。これらの回答を総合して、暴力に対する支持と狂信的支持のスコアを最小値 0，最大値 1 となるように作成した。各スコアを従属変数として、Wagner (2021)の方法で指標化した個人レベルの感情的分極化スコア（政治リーダーに対する好悪のバラツキの大きさ）を主な独立変数とする回帰分析を行った。性別、年齢とその 2 乗項、学歴、居住地域、投票予定候補者と絶対に投票しない候補者を統制した。

その結果、暴力に対する支持と感情的分極化スコアの間に相関が認められなかったのに対して、狂信的支持スコアは感情的分極化スコアと有意に正に相関していた。感情的分極化スコアが 1 標準偏差高いと、狂信的支持スコアが約 0.05 高いと予測される。投票予定候補者別に分析すると、この正相関は、ドゥテルテ支持者が多いマルコスへの投票予定者だけでなく、反ドゥテルテが多

いロブレドへの投票予定者の間でも観察される。

この回帰分析は、測定されていない交絡要因を統制できておらず、また、各従属変数と感情的分極化のどちらが先行するのかを特定できるわけでもないことに注意が必要である。とはいえ、ここで得られた結果からは、民主主義を後退させるような強権的リーダーの登場が、感情的分極化を誘発し、それによって、強権的リーダーの支持者のみならずそれに反対する者の間でも、対立する立場を尊重しない狂信的な態度の形成を促す可能性が示唆される。

なお、本報告書を執筆した研究分担者は、研究助成期間中に、以上のプロジェクトとは独立に、日本の有権者の間でポピュリスト政治家への期待が若い政治家への支持につながっていることを示す論文を執筆し、海外学術誌に掲載した(Miwa 2025)。

助成対象の課題に関係する分担者の業績

Miwa, Hirofumi. 2025. “Why Voters Prefer Politicians with Particular Personal Attributes: The Role of Voter Demand for Populists.” *Political Studies* 73(2): 725–752.

Miwa, Hirofumi, Ikuma Ogura, and Yuko Kasuya. 2022. “Trends in Affective Polarization around the World.” Paper presented at the annual meeting of the Japanese Political Science Association.

Miwa, Hirofumi, Ikuma Ogura, and Yuko Kasuya. 2025. “A New Measure of Country-Level Affective Polarization.” Paper presented at the 2025 International Conference on Asian Election Studies.

それ以外の本報告書での引用文献

Boxell, Levi, Matthew Gentzkow, and Jesse M. Shapiro. 2024. “Cross-country Trends in Affective Polarization.” *Review of Economics and Statistics* 106(2): 557–565.

Bryan, James D. 2023. “What Kind of Democracy Do We All Support? How Partisan Interest Impacts a Citizen’s Conceptualization of Democracy.” *Comparative Political Studies* 56(10): 1597–1627.

Druckman, James N., Erik Peterson, and Rune Slothuus. 2013. “How Elite Partisan Polarization Affects Public Opinion Formation.” *American Political Science Review* 107(1): 57–79.

Garzia, Diego, Frederico Ferreira da Silva, and Simon Maye. 2023. “Affective Polarization in Comparative and Longitudinal Perspective.” *Public Opinion Quarterly* 87(1): 219–231.

Gidron, Noam, James Adams, and Will Horne. 2020. *American Affective Polarization in Comparative Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.

Iyengar, Shanto, Gaurav Sood, and Yphtach Lelkes. 2012. “Affect, Not Ideology: A Social Identity Perspective on Polarization.” *Public Opinion Quarterly* 76(3): 405–431.

Krishnarajan, Suthan. 2023. “Rationalizing Democracy: The Perceptual Bias and (Un)Democratic Behavior.” *American Political Science Review* 117(2): 474–496.

Orhan, Yunus Emre. 2022. “The Relationship between Affective Polarization and Democratic Backsliding: Comparative Evidence.” *Democratization* 29(4): 714–735.

Wagner, Markus. 2021. “Affective Polarization in Multiparty Systems.” *Electoral Studies* 69: 102199.